
真・恋姫†無双～南北コンピの三国志～

クーロン

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

真・恋姫†無双〜南北コンビの三国志〜

【Nコード】

N7075Y

【作者名】

クーロン

【あらすじ】

北郷一刀と幼なじみの南郷仙刀のコンビが三国志で大暴れ！！
「いや、ぜんぶ仙刀の悪ふざけだから！！」「人になすりつけんな。サイテーだな」「お前よりマシじゃアアア！！」
…まあ、こんな具合でお送りする三国志開幕です。

碌でなしの幼なじみ

幼なじみ

この一文字に何を考えるだろうか？

同い年のかわいい娘？ちよつと年上のお姉さん？それとも妹系？
だけどさ…現実ってきびしいよね…俺の幼なじみはさ…

「オラ、一刀さつさと打ち込めや。やらねーとシバくぞ」

…こんな奴だよ…

俺は北郷一刀。聖フランチェスカ学園の学生。正直、今メツチャ困
ってる。その原因が…

「ま、おれからいくけど。何やろっかなー 正拳、前蹴り、貫手、
上段、下段…どれがいい？」

このバカ>幼なじみくだ

因みに言っておくが今の状態は剣道場で向かい合っている状態。俺
は竹刀、防具とフル装備で相手は…

下は袴、上は空手着、そして素手。お前の方が有利だと思っ奴…
甘いよ…

実はこいつ目茶苦茶空手が強い。

ついでに合気道も。

あとタイキックもヤバいなガ 使見て習得したらしいけど…

色々あるけど何を言いたいかというと…

俺、絶体絶命

「仙刀、勘弁してくれよ。まだ死にたくない。ガチで。」

「大丈夫、死にやしねえよ。六分の七殺しにするだけだ。多分…」

「オーバーキルじゃねえか！…しかも何だ多分って！…」

「運が良ければそうなるから大丈夫！」

「アウトじゃボケエエエエ！…」

で、この馬鹿が『南郷仙刀』なんごうせんとか碌でなし。小学校に入る前からの付き合いだけど…どうしてこうなった

素手同士なら普通に勝てるからつまらん。とか、ぬかしやがってこれ。異種格闘戦。

こっちの方が楽しいとか言ってるじゃねえよ。
頼むから地下闘技場行け。そして逝け。切実に。

外史入り（前書き）

やっと出来ました。

小説書くって大変ですね。

外史入り

SIDE 一刀

「ヴァアア、疲れた。体痛い。帰りたい。」

「弱すぎんだろ。何で素手相手に負けんだよ。」

「黙れ外道。いきなり金的とか何考えてやがる。」

仙刀は昔から空手バカだからやったら空手が強い。

あと、合気道も

タイキックもヤバいな

ガ 使見て学んだらしい。

及川を一撃で仕留めてたな、アレ…

ジジイに鍛えられた。護身用と言ってるけど…

武器持ちに素手で圧勝とかおかしいから。

動きが護身じゃなく殺る動きだから。

格闘のジャンルの多さもおかしいから。

他にも色々、手を出してたような…

そして部活中の剣道VS空手。これがウチの部の名物だったりする。

隣の空手部員全員倒したらこっちに来る。そして俺と試合（ルール、情け共に無用）

不動先輩も顧問もこれを黙認している。

そして、準備運動と称して倒され、隣で寝てる空手部の皆様。ご愁傷さまで…

こんな奴が生まれたせいで…

「で一刀。お前、寝てて良いの？世界史のレポあるとか言ってるなか

「つた？」

「ヤベエ！！資料館閉まる！！」

「あーあ、いつまでも寝てるから…」

「誰のせいだよ！！！！！」

「え？不動サン」

「お前だよ！！何、先輩になすりつけてんだ！！！！！」

「ノリ」

「舐めとんのかアアア！！！！」

「うるせーな。絶叫してないでさっさと行け。閉まんぞ。」

「仙刀。お前も来い。閉じてたら、しばくから。」

「ハ？やだよ。一人寂しく行けよ。」

「いいから来いよ。」

「へーへー、わかりましたよ。」

こんなやり取りは何時もの事。

俺達は着替えて、資料館に向かった。

SIDE 仙刀

なんとか、資料館は開いていた。面倒い。

そして一刀のレポに付き合う羽目になった。ダルイ。

この資料館は学園長が趣味で集めた物がほんどらしい。その金俺にくれ。

そんなこんなで色々骨董があるらしい。正直どうでもいい。

「お、三国時代の壺だつてよ。」

「メンマ入れだろ」

「あ！夏侯惇の剣だつてよ。かけー！！」

「錆びた鉄の棒だな」

「スゲエ！！金印だ！！」

「メツキだな」

「お前さ…もう少しは歴史に興味持てよ。」

「嫌だよ、地理で限界。それに俺理系だし。」

そう、何を隠そう俺は理系だ。歴史、古典とか無理。赤点常習。向上心0。

もう開き直っている。

…まあ、一刀にバカにされるとキレるけど。理科、数学はできるからいいの。

…バカにされたの思い出したらムカついてきた。後ろから、延髄斬りかタイキック何をやんのか考えていると一刀が

急に止まった。…CHANCE!!!

「おい、仙刀。アレ見ろ」

「あ？」

正拳をしようとしたら話かけてきた。
チツ

「どうした」

「アレ」

一刀の指差す先には白服の男。
ぱつと見、同年代。
けどウチの生徒じゃないな。

「部外者…泥棒か？」

「多分。アツ逃げた！何か持つてる。…仙刀追って。」

「何でさ。いいじゃん別に。古くさいものの一つ百個盗られようが。」

「よくねーよ。てか、多いから。お前の方が足速いんだから早く行け。」

「人使いの荒いことで…。ま、追うけど」

一刀は後で殴る事にし、あの白服を追う。
当然、足音をたてずにだ。気付いてない…。油断してやがるな…。

狙うか。

SIDE 一刀

…アレ？あいつ、いい顔してんだけど…

あの顔すると碌なことしないんだよな。

あ、跳んだ。て、事は…

「逃げてエ！その白服！！超逃げてエ！！！」

叫んだのが悪かったのか、白服が振り返った瞬間にバカのドロップキックが顔面に突き刺さる。

そのまま白服は倒れて後頭部強打。

うん、綺麗なドロップキックだ。

タイガー スクモホレボレするだろう。

そして、綺麗な着地。

直後

『パリーーン！！！！！！！！！！』

快音。

まあ、こうなるよね

「よっしゃ！！成功！！！！一撃で仕留めたぜ！」

「大失敗だよバカ。どうすんだよ…えっと鏡だなこれ…」

カバンを置いて近づく。うわ、粉々じゃんコレ。どうすんだ。

「ハア？鏡？これが？ボケたか？良い病院紹介しようか？」

「うつさい黙れ。昔のはこうなの。つか、どうすんのこの鏡。あんなどこ置かれてたし、多分かなり高いぞ。」

「マジで？」

「うん。学園の物だし、たぶんかなり弁償することになるな。絶対修復無理だなこれ…」

ピロリン

あれ、今こいつ何した？

「よし、逃げるぞ」

「待てやゴラ。何しに行く気だ。」

「この写メ見せて一刀が鏡割ったことにするだけだ」

「何てことしようとしてんだ！！！！」

「だってお前の言い方だとメツチャ金取られそうじゃん！！ケツの穴ちぎれるまで！！」

「無えよ！！二つの意味で無えよ！！！！」

コイツ…正真正銘のクズ…っ！！

「止める！！放せ！！掴むな！！」

「放したら逃げるだろうが！！」

「うん！！」

「絶対に放さないからな！！放したら俺に全部なすりつけるだろ！！」

「当たり前だアア！！」

「小学校から道徳やり直せエエ！！」

…武道つて、人間教育も兼ねてるんじゃないっけ？

武道やってガチのクズがいるんだけど、なんとかして下さい。そんなことしてたら急に仙刀が抵抗を止めた。

「おい、一刀…後ろ…」

仙刀に言われて振り向く。そこには

粉々に砕けた鏡から光が溢れだす幻想的な光景
思わず力がゆるんだ。

「今のうちっ！！」

「逃がすかあ！！」

その瞬間逃げ出しやがったクズのズボンの裾を掴んで捕まえる。
ベブオとか奇声を発したが気にしない。

「お前掴むな！！鼻打った！！」

「ふざけんな！！てか、何で俺のカバンも持って逃げようとしてんだ！！」

「お前の財布と貴重品をパクるために決まってんだろっが！！」

「最低だよ！お前！！」

必死で格闘してると何やら引つ張られる感覚。まさか…

「お前何やってる！！引つ張んな！！」

「違う！！鏡が吸い込んでる！！」

「どういう理屈だよ！！」

「分からない！その白服何か知ってる！？」

仙刀が蹴り飛ばした奴に話を振る。

…頼む…答えてくれっ！

だが祈り虚しく、そこには完全に伸びていた白服。

「へんじがない。ただのしかばねのようだ…。」

「なんでそんな余裕なの！？ってウワッ！！」

急に吸引力があがった。ヤバい外れるっ！

「よし、剥がれた！！これで勝て「逃がさんつつ！」ギャアアア！
！また取り憑かれた！！お前何なの！？新種のボ ビー！？」

「許さない…逃げるなんて…絶対に…！！」

ここで逃がしたらマズイ！！！！

「ヤンデレ風に言っな！！キモいから！！くそっ！！手を蹴れば…
分かった蹴らない！！止める！！だから登って来んな！！腰から手
を放せ！！」

「ヤダ」

「正気かお前！！」

傍からみたらヤバい画だけどそんな事気にしてる場合じゃない！！

「オマエハミチヅレダ…」

「怖エエエ！！怖いから止める！！」

「オマエダケニゲルナンテユルサナイ…ッ！！」

「ぐああああ！！貴様ああ！！」

SIDE 三人称

末代から呪ってやるからなあああ！！！！

という叫びが止み静かになった資料館。

その伸びた白服以外にもう一人いた。メガネの男が

「やれやれ、災難でしたね、左慈。大丈夫ですか。」

眼鏡の男は伸びている白服に話し掛ける。

「ん、くああ」

「お目覚めですね。さあ、帰りましょう。」

「……………」

「左慈？」

左慈と呼ばれている白服は目を覚ましそして…

「あれー、ここどこー？」

強い衝撃で記憶喪失プラス幼児退行していた。

そして眼鏡の男を小首を傾げてクリックリの目で見る。

「クハッツツ!」

そして資料館の一部が紅にそまったが、それは些細なことだろう。

外史入り（後書き）

次回から本編になります。

これからもこの駄文をよろしく願います。

キャラ紹介 主人公（前書き）

本編の前に。

読み飛ばしてかまいません

キャラ紹介 主人公

オリ主：南郷 仙刀 > なんごう せんとく

性別：男

立場：武将

特記事項：格闘好き 特に空手、合気道。他の武道の技も使います。

名前：北郷 一刀

従来の主人公。むしろ、同姓同名のオリキャラの扱いが正しいかも。

立場：文官

特記事項：この作品では蜀 で甘やかされるのではなく、成長する一刀を書きたいと思います。
突っ込み、ぼけの両刀使い

名前：????

真名：????

性別：????

特記事項：とある有名諸侯の関係者。

外史で出会うオリキャラ。仙刀、一刀が成長するためのキーマンを

予定。

キャラ紹介 主人公（後書き）

次回から本編に本当に入ります。
よろしく願います。

まさかの修業編！？（前書き）

本編スタート

よろしく願います。

まさかの修業編！？

SIDE 仙刀

「一刀！！お前のせいで変なところ来たじゃねえか！！責任とって去勢しろ！！！！」

「黙れ！！お前が鏡割ったせいだろうが！！責任とって腹切れや！！！！」

何か周りの景色がドラ もんのタイムマシンで入れる空間っぽいけど気にしてる場合じゃねえ！！こいつを始末するのが先だ！！

「大体何でまだ俺のカバン持ってるの！？」

「パクると言っただろうが！！」

「返せ！！」

「ヤダ！！」

いい加減しつこい野郎だ……そろそろウザイ

「あー！！とりあえず腰から手を離せ！！」

「タラバツッ！！」

SIDE 三人称

さて、ここで賢明なる読者諸兄に聞きたい事がある。
柔道技で内股というのをご存じだろうか？

知らない方への説明としては簡単に言うと
相手を掴み片足で相手の太股をとって投げる技だ。

この際、股関節あたりを狙うのがポイントとされている。
尚、身長差が大きい。技使った方が下手な時には股間強打の惨事になる。

そして一刀の身に何があつたのかは想像にお任せしよう。

そして、この状況下で喧嘩、罵りあいをする二人を見て

『ああ、こいつらはバカじゃないか』

と思つた管理者が多数いたそうな。

『あれー？変なとこ来たよー？宇吉ー。』

『ムフフフフ。このご主人様なら私の愛を受けとめてくれるかもしれないわねん。』

『ム、抜け駆けは許さんぞ貂蟬！！』

大絶賛キャラ崩壊中の奴と漢女の管理者をのぞいて…

SIDE 仙刀

「そのまま落ちろ！！」

「んぐ、わアアア！！」

足腰を一気に振って投げる。

それで一刀ボ　ビーは剥がれた。

「仙刀貴様！！氏ねええ！！」

「恨むなら、あの世で恨みな（笑）」

突如閃光。そして一刀が消える。

「！？何で！？」

そしてまた俺も、のまれた。

白き輝く衣身に纏い天の御遣いが降り立つ。

『華琳様！！外を御覧ください！！』

『ええ、秋蘭。見えてるわ。』

その者。一人は己が拳で、

『雪蓮。』

『ええ、分かっているわ、冥琳。あれは、益州の方ね…。』

もう一人は己が知で、

『愛紗ちゃん!! 鈴々ちゃん!! あれ!!』

『ええ、ですが…』

『遠いのだ…』

天下に平和をもたらさん。

『桔梗様!! あれを追わねば!!』

『…焰耶。あの山。流星が落ちた山には近づいてはならん!!』

『何故ですか!!』

『あの山は…』

『黄忠様』

『そうね。各部隊に伝達を。命が出るまで待機。』

『ハッ』

『あれはもう…。どうしようもないわ…。』

『カイオウ様!!!!!!』

『ふむ…擂台にのう。』

天下が動き始めた。

SIDE 仙刀

っ痛ー。なんだここ？

視界が開け目に入ったのは

少龍寺とある建物。

周りは山っぽい。

「なんだ…ここ。」

！！？？

突如悪寒。

「ふむ…よき反応…。筋は良いのう。」

バックステップで間合いをとって相手を視界に入れる。

なんだこいつ…ジジイか？…

さっきの感覚も何だ？

「多少、拳法をかじってるみたいじゃのう。」

ジジイだ。多分そうだ。

だけど何だこいつは？

肌は皺で鱗のようだ。

髪は真っ白。声も皺枯れている。

拳法衣を着たジジイ…

いや、そんなことはどうでもいい。

ただ…

（スキが無え！！）

只、立つてるだけ。しかし威圧感がおかしい。異常だ。構えは崩さない。

そのまま話し掛ける。

「すま…すいませんお聞きしたい事があります。」

「何じゃ、言ってみい」

普段使わない敬語。

なぜかこいつには有無を言わず使われた。

「俺以外にもう一人来ていませんか？黒髪で同じ制服着た男が。」

「いや、おらんのう」

一刀はいないらしい。

…あいつ…どこいったんだよ…

「それより。」

急に話し掛けられ意識を戻す。

「そこは、擂台というてのう。拳闘の場じゃ。」

そうなのか？

完全に土足…悪いことしたな。

「すみません」

「いや、別に良い。」

頭を下げるのを止めた。

じゃあ、何でそんな事言っただんだ？

「見た所、ぬしも拳法をしとる。そして擂台で向き合っ
ておる。…
やることは一つしかあるまい。」

そういつて口角を吊り上げる。

このジジイがヤバいという感覚はある。

…だけどさ…

「そうですね。一試合やりますか。」

好奇心の方が優ってる！！

この人と試合したいッッ！！

「ふむ、その前にぬしの名を聞いてもよいかの？」

「南郷仙刀と言います。」

「わしは界皇、と呼ばれておる。よろしゅう。」

「よろしく願います」

挨拶し、そのまま頭は下げずに踏み込む！
先手とつた！

昔からやってきてもう何千、何万ダースやってきた正拳 それは…

「青いのう」

当たった。確かに当たった。

…なのに…入った気がしない。

「どうした？打ち込んでみよ。」

「言われなくてもツツ！！」

正拳、前蹴り、手刀、下段蹴り、貫手、掌底。この技が全て当たった。

…なのにツツ！！

「よしよし。基礎は出来ておる。上達は早いじゃろうな。」

紙に当てたぐらいにしか感じないツツ！！

なんだよこれ！？

「次はわしじゃ。ホレ」

ゆっくりした拳。

だけど…俺は…

「！？」

全力で退いた。

…体から冷や汗が止まらない。

なんで？あんなヨボヨボパンチに…

「ッオオオアー!!」

タイキツク!!

一刀と及川を実験だ! モルモットにして鍛えた技。
それを…

「ヒュウ」

宙を舞う界皇。

分かった。この手品の種が。

「…消力>シャオリ<…ですか?」

「気付いたかのう。よもや、知っておるとはな…」

消力。

人間は通常、衝撃がくる際には体が固まる。

それを逆に体を軟らかくすることで衝撃を逃がす技。

それが消力

巧夫の奥義だ。

「それッ」

「ッハッ!!」

腹に一撃もらった。

胃と肺の空気が一目散に逃げ出す。

そのまま地面に叩きつけられる。

辛うじて受け身を取り頭を守る。

「ふむ、大分加減したんじゃないが…」

有り得ない。

それであれかよ。

足が震える。怖いんだ。

だけど…

「呼ッッ！！」

逃げない！！

真っ直ぐ正拳を加える。

絶対に一発ッ！！

フワッ

回転する世界。

足元に空がくる。

そして俺の意識はブラックアウトした。

SIDE界皇

「誰がある？」

「ハッ！」

「この者を休ませよ」

「御意！！」

フム、良き士。

良き強者。

あれで諦めずに向かうか。

恐怖を知りて尚。

最後のは意志の籠もった一撃じゃった。

…育ててみるか。

そしてゆくゆくは…

ふむ、楽しみじゃ。

まさかの修業編！？（後書き）

戦闘シーン書くのキツい…
誰か文才を！

カイオウゝ強くなりたくばゝ（前書き）

原作キャラとそろそろ絡めます。
仙刀はどうしょうか？

カイオウ、強くなりたくば、

SIDE 二刀

「っ痛ー。」

あの馬鹿に投げられた。

ついでに股間も蹴られた。

…絶対に復讐してやるからな…！！

「てか、ここどこだ？」

現在地は何故か荒野。

…資料館に居た筈なのに

あの鏡のせいかな？

…それしか考えられない。

てことは…あいつのせいで…！！

「……………！！」

突如、後ろの茂みが揺れる音。

バカが居るのか？

「！！」

一際大きくなった。

今だ！！

「うらアア！！」

飛び蹴で仕留める！！
恨みを全てこめてなあ！！

「…アレ？」

しかし足の先に居たそれはバカではなく、
黄色い布を頭に巻いたおっさんだった。

「「ア、アニキイイ！！??」」

あ、ヤベ。

人違いだ。

・・・

「じゃ、そゆことで」

「「待たんかイイイ！！」」

さりげなく帰る作戦…失敗

「お前！！よくも兄貴を！！」

「ゆ、許さないんだな！！」

ヤバッ

怒らせちゃったよ…

「すみません。悪気は無かったんです。」

「あんな飛び蹴しといてか!？」

「ホントすいませんでした。人違いで…」

「それで許されるワケ無えだろ!!」

「申し訳ございません」

悪いのはこっちだ。

本当に申し訳ない。

「チツ…本当に謝る気があるんなよ…」

そう言つてノツポが腰に有るものに手を伸ばす。

…あれは…剣？

まさかね

「身ぐるみよこせや!!」

澄んだ抜刀音。

本物？

「…銃刀法って知ってます？」

「ア？何言つてんだ？」

知らないの!？

どんなド田舎でも有り得ない。

てか、『身ぐるみよこせ』ってどこの山賊だ。
うん…賊…？

「オラァァ！！」

「！？」

切り掛かって来た！？

足元を見ると草が切れてる。

え、何？マジ？

ガチ剣！？

「嘘！？その剣本物！？」

「ああ、そうだよ。へへッ…、ビビッてんのかあ」

いや、そうでもない

残念ながら仙刀の空手の方が怖い。

…てか、怖さが、刃物<仙刀ってどういう事だ…

でも…

こっちは素手。向こうは剣持ち。

ヤバい事には変わり無い。

どうする…？

「うつくう」

「兄貴！！」

「お、起きたんだな！！」

ヤバいな…復活かよ…

「よくも、俺の顔蹴ってくれたな…」

こいつも剣持ち。

逃げようにも、逃げれる気がしない。

…万事休すか…

「待てーい!!」

遠くから誰かの声。

…なんかゴレン ヤイが頭をよぎった。
違うよね？

「この賊共が!!その御方に手を出すな!!」

「ひでぶっ!!」

「あべしっ!!」

「たわばっ!!」

一瞬でのされ、世紀末的雑魚風にやられる山賊（仮）

「この賊共!!劉玄德が一の家臣、関雲長が討ち取った!!」

ハ？劉備？関羽？

…何言ってるのこの人。

SIDE 仙刀

「998!!999!!1000!!」

日課の空手の基本技各千本を終わらせる。

ここに来る前からの日課。

今、俺はここ少龍寺>シャオロンジ<で修業をしている。
半年前

『お願いします!!俺を鍛えて下さい!!』

俺は土下座して頼み込み、界皇様に弟子入りした。

快諾してくれたのは、正直かなり嬉しかった。

俺は界皇様の強さ、レベルの高さに惹かれた。

いや、違う。

…魅せられた。

あの技に

そして俺の修業が始まった。

「『氣』ですか。」

「左様。」

先ず、習ったのが氣。

どうやら、生命エネルギーらしい。

それは女性に多いとか。

…だが気になったのがコレだ。

「それが豊富な者程強い。故に女子が強い。」

どうやら基本的な強さは

一般女性＜男性＜氣の豊富な女性らしいが。

こんなこと聞いた事無い。

こんな有り得ない理論が通る。

そこから異世界じゃないかと判断した。

しかし、女が皆強いとかいったら…

…元の世界も同じか…

頭に過った俺のジジイで空手と合氣の師匠が婆ちゃんに追い回される姿を思い出し考え直す。

…それよりもだ。

…あの糞野郎のせいで異世界に送られたのかッッ！！

あいつは俺の拳で潰すッッ！！

「さて、やってみると良い」

早速、氣の体感になった。

瞑想して感じるらしい。

しかしこうしてると眠くな…

「どこだ？どこ？」

「ようこそいらつしゃいました。南郷殿。」

「!?!?…誰だ。」

「お初にお目にかかります。宇吉と申します。この度は恩を返したくお呼びしました。」

「ホントに誰?初対面なんだけど。」

「ですが、あなたのお陰で左慈をモノにできました。重ねてお礼申し上げます。」

「うーん、記憶に無いな。」

「まあ、こちらの話ですから。そして私としては何か恩返ししたいのですが…」

「なら…」

そして俺は宇吉には氣の修業を頼んだ。

どうやら夢の中でも術で干渉できるらしく、夜に氣の修業となった。

…その結果。

昼に拳闘

夜に氣の修業（睡眠学習）
となった。

何このスケジュール

甲子園常連の野球部よりキツくね?

日に二十四時間、いや三十時間の矛盾ッッ!!

に近い修業の日々
しかもその内容が…

「猿退治？」

「ウム。」

一つ目がこれ。

しかし只の猿じゃない。

『ホキョアアアッ！！』

…夜 猿？

…死にかけたよ。マジで。勝ったけど。

小便チビらなかったただけマシか…

確かにアレなら地上最強の生物も満足するだろうよ…ッ！！

二つ目が…

「また猿退治ですか？」

「然り。これはわしが案内しよう。」

そして来たのが

やったら草木が薙ぎ倒された場所。

「アレを倒せ」

「…………アレって」

真っ黒な体毛

鋭い牙

鬼みたいな二本角

「金獅子？」

「よくわかったのう」

… コレは無い。

「おお、そうじゃ。」

界皇様が奴の後ろに近付きなさる。

… まさか！！

「それ」

手刀による一閃。それで
奴の尻尾を切り落とした。
マジで勘弁してください

『……………ツツ！！！！』

言葉にならない咆哮。

え、倒すの？あれを？

当然、黒かった体は金色へ

あの超野菜人っぽくなってる。

「頑張るのじゃ」

「え？帰んの？ちょ待て」

『ーーーーッッッッ！！！！』

「せめてネコ飯を食わせてえ！！！！」

ハンターの皆様の偉大さがよく分かりました。

G級の方々。頑張つて。

そしてネコ可愛がつてね。

チケツトいっぱい持つてるリーダーもね。

その修業をし、帰つて来たら…

「ッッ！！」

不意打ち

やられたらメシ抜き。

不意打ち、奇襲は受ける側の未熟だとよ。

…俺のジジイにもやられてたよ。残念ながら。

そんな環境下だから、氣は内氣功と治癒がかなり出来るようになった。

外氣功とかあるらしいけどムリ。

使える奴いんの？

そんな感じのことを振り返っていたが中断された。

「南郷。」

「ん？」

「界皇様がお呼びだ。付いてこい。」

呼び出しかよ。しかもまた。

「げ、またヤバいのやらせんじゃねーか？あの人…」

「さあ？」

同じ門下の人と話ながら、いらっしやる本堂に向かう。
今度は何を言われるやら…

「南郷よ」

「はい」

いつもとは違う。

門下がかなり本堂に集まっている。
…こっ見るとかなりいるんだな。

「ぬしが入門し半年が経った。」

「そうですね。早いものですね。」

なるべく当たり障りないことを言う。
この人の気紛れは俺の命に関わる。

「して、ぬしの目的は何だったかのう？」

「えーと、何だっけ？」

「忘れたのか？」

「いやー、すいません。余りに此処での修業は中身が濃いですから。」

ホントにな。

「なら、これで思い出すかのう？ホレ。」

「これって……」

渡されたのは、修業始める際に預けた荷物。
そして制服。目的…あ！！

「あの野郎!!!ぶつ殺す!!!YAI!!!HAI!!!」

「…思い出したようじゃのう。」

界皇様が何か仰ってるが関係無え！！！！

ああ、一刀。オマエヲハヤクシマツシタイヨ……

「ぬしが来た時と同じ事がおこつたぞ。」

「マジでござりまするか!？」

そうか……これで一刀の手がかりが！！

「界皇様！！いますぐ消してきます！！」

「落ち着け。たわけが」

「べブッ!！」

頭へのチョップが入った。

マジ痛い。

「そもそも何処の話と想ってるのか」

「此処。」

「違うわい。」

「なら何処ですか?」

体がソワソワする。

ホント…何処にいるのか…

「東」

「は?」

「ここからずっと東じゃ」

マジ?

何、面倒臭いところに落ちてんの?

「そこでじゃ。ぬしはその友「実験台です。技の。」…まあ、その者の所にいくのじゃろう。」

「…そういう約束ですしね。」

そう。修業当初の約束。

一刀の居場所を突き止めたなら教えてほしい。
厚かましい願いだなんて分かっている。

だけど教えてほしい。

俺が土下座したのもコレが理由だったりする。
やっぱ一刀を放っておく、なんて出来ないから。

「じゃから、南郷」

「ハッ」

「ぬしを破門とする。」

「ハ？」

え？今、なんて…？

「ちょっと破門ってどういう事ですか！？」

「破門。師が門人との関係を断ち門下から除くこと。じゃ。」

「意味じゃねえよ！！何で破門の必要が…！！」

「なら、巧を成さずして皆伝にしてもらう気かの？」

「違いますよ!!」

「まあ、これは決定じゃ。覆らん。諦めよ。」

そんな…

ヤダよ。そんなこと。

絶対に。

「そのような顔をするでない。代わりにぬしには号をあたえよう。」

…号？

「ぬしは相手の攻めを受け入れ守ること、そして攻めの激しさ。その緩急さながら海の如し故に…」

「号を『海皇』。南郷海皇を名乗るが良い。」

なんだよ。それ。

「……………」

「どうした？海皇。」

「その号。海皇。ありがたぐいだだギバズ!!」

正座し、深々と頭を下げる。

嬉しい。

目の前がぼやける。

ホントに、嬉し泣きつてあるんだな。

「よかるう。最後じゃ。この言葉を心に留めよ。」

顔をあげる。

真っ赤な目なんて見られていい。

「強くなりたくば喰らえッッ!!

昼も夜もなく喰らえッッ!!

強者を喰らい続けよッッ!!

して、ぬしは喰われ飽きぬ者であれ。

いくら喰われようが喰われ飽きぬ者。

高き壁であり続けよ。」

「その言葉、ぜっだいにわずればぜんッッ!!」

涙をぬぐう

深呼吸。

「ありがとうございます!!!」

最後に頭をまた下げる。

もう、二度と会えないかもしれない。

…強くなります。

制服に着替える。

懐かしい着心地。

ここんとこずつと拳法着だったしな…

一刀。

すぐにそっち行くからちょっと待ってろ。
元の世界に帰ろう。

堂から出る。

最後に一礼。

なんか、頭をあげたくない気がする。
でも…行かないと。

「…荷物忘れとるぞ」

最後の最後で何やってんだ俺…

SIDE界皇

「よろしいのですか？」

「何がじゃ？」

「号です。破門の身でありながら…」

そのことが…

「よいよい」

「界皇様！」

「わしは意外と美食家じゃ。」

「……………」

「そして小龍寺は同門の本気の戦いを禁じておる。」

「……………!!」

気付いたようじゃな。

南郷よ。ぬしはこの世で一番の美味を知っておるか？

皇帝でさえ喰らえぬ美味。

それはよい芳香の強者。

その技を全て下して勝つことじゃ。

ぬしなら集めるじやろう。

その芳香を

ぬしからも漂うやもしれん

その日を楽しみにしとるぞ。

何はともあれ先ずは長生きじゃな。

ヒヤヒヤヒヤヒヤヒヤ!!

カイオウゝ強くなりたくばゝ（後書き）

若干シリアス（？）

やっぱシリアスってキツイ
…キツイのばっかだ

V S 雷銅！……ここは益州、白帝城（前書き）

戦闘パート多め

体力がやばい

VS雷銅！――ここは益州、白帝城

SIDE 一 刀

「お願いします！私たちに力をかして下さい！！御遣い様！！」

今、劉備って名乗る女の子に頭を下げられている。

今、分かっている事は

一、目の前の三人は劉備、関羽、張飛の桃園三人組だ。

二、今の世の中は黄巾賊がいる。

三、現在進行形で乱世

四、俺は天の御遣い

だ。

最初はドッキリだ、と思っていたが、
さっきの賊は

黄巾賊であることに間違い無いらしい。

そもそも、本物の武器を持っているんだ。

今の日本なら有り得ない。

で、一番頭を悩ませるのがコレ

この三人、全員女だ。

どうやら過去に飛ばされたんじゃない
なく
パラレルワールド的な場所に来た。

…この原因つてさ。
頭に怨敵の顔が過る。

全部あいつのせいか…!!

「お願いします!! 今、力の無い人達が虐げられています!!」

「その世の中を変えるため力を貸してほしいのだ!!」

「皆が笑って暮らせる世を作るため協力して下さい!!」

……………

「うーん、大した力には成れないけど、協力するよ。」

正直、この話を蹴る気は無い。

また一人でいたら絶対賊に襲われオダブツだ。

「ありがとうございます!!」

だけど、これは言わないと。

「でも、天の御遣いを名乗るのは不味いと思う。」

そう、これがもし本当に後漢

三国時代なら

天 皇帝だ。

そして、そんなの名乗るなんて、皇帝に対しての喧嘩以外の何物でもない。

「でも、それじゃあ人が…」

「うん。だから、どこか集まる場所…公孫賛の所の義勇軍に成るのが良いんじゃないかな？」

「あ！白蓮ちゃんの所か！！」

「桃香様…まさか忘れていらしたのでは…」

「えへへ」

これが劉備…ね

…皆が笑って暮らせる世。か…

そして、戦う…か

劉備、危ないよ。

その理想。

SIDE 仙刀

お、着いた。

界皇様が仰った方に行ったら城があった。

「先ずは情報だな。」

そして一刀の情報を集めるため入った…けどさ。

「うーわ、何コレ？」

アスファルトなんてひかれてない道路。
車は無い。

電車も無い。
服が昔。

「…映画村？」

有り得ない。

異世界の上、タイムスリップとか何？
ガチで止めて。
で、

「おい…、こっちはなあ、出すもん出せや、つってんだよ。」

「や、止めて下さい…！今、家にはそんなお金が…」

「アア？なら娘出せや…！」

「キャアツ…！」

「お母さん！？」

そっちは何やってんだか。

なんか…助けに行け…！的なものの匂いがプンプンする。

ま、試したい事あるし丁度いい。

「…！？ああ？てめえ何か用でもあんのかよ？」

わざと肩をぶつける。
やっぱこっくるよね。

「……………」

「てめえ…何か言えゴルア」

田舎のヤンキーを上回る首の傾き。

そして、メンチビーム

いやー、

「弱そ」

「「何だとゴルア！！！！」」

一言で切れてくれる三流ヤクザ
実験台に丁度いい！！

「うらあ！！」

パンチ。遅ッ。

左手で払い、右の手刀を首へ。
滑らかに入る。

「ッハ！？」

一撃で沈む。

「「てめえ！！よくもやりやがったな！！食らえ！！」」

今度は二人同時。

今度の狙いは足。

「「ん なっ!!??」」

体を屈めて軽く体当たり。
それで相手が倒れる。

「「ン バッ!!」」

倒れた所で足刀を首に。
それで終了。

「うん。強くなっている。」

数秒で片がついた。

あの修業が身についてない。とかなっていたら、死にたくなるしな。
いや、良かった。

「良いねえ、アンタ。強いねえ。」

!? まだ居た!?

「そう身構えんな。俺は警備隊の人間だ。そいつらの親玉じゃねえよ。」

「そうか。ならアレ豚箱にぶちこんどいて。」

さよならモルモッツ

「ああ。だがその前にだ。」

あ、戦闘フラグ

「あんと手合せ願いたい!!」

ほら見る。

申し出は快諾。

しかし街中という事もあり、現在は移動中。

「そついや、お前いつから見てた？」

「さっきの喧嘩かい？アンタが肩をぶつけた所からだ。」

「警察がそれってダメだろ」

笑いながら答える

「ハッハー!! 違いねえ!! だが喧嘩好きってのは俺の性分だね。死ぬまで治らねえよ!!」

こいつ楽しいわ、やっぱ。

メツチャ良い奴だ。

豪快な性格。

馬が合うってこの事だな。
きつと

外見は2メートル近い大男。

髪は銅色で、ライオンを連想する髪だ。

筋肉質な体。

筋力勝負は不利だな。

そして片手には二又になった槍。

その後ろは鉄を固めてある。

刃の付け根には虎の皮が巻き付けられてる。

重そうだ

会話を楽しみながらも観察は欠かさない。

敵のタイプは把握しないとね。

「でだ、今何処に向かってんだ？」

「ああ、手合せなら審判が必要だろうが。お、居たな。」

視線を前にやるとコレまた大男。

鹿の角みたいなのがついた兜に

全身に鎧を纏っている。

そしてやっぱり武器持ち。

槍だ。ただ突きと斬るを両方求めてか刃の部分がデカイ。

「おーい忠！！こつち来てくれよ！！」

「む、慶にござるか。」

どうやら、友ダチみたいだな。

「おう！！これから一手仕合つからよ。審判やってくれや。」

「よかるう。」

話。ついたみたいだな。

「さて、仕合うか」

「え？ここ？」

普通に街中だぜ？

「何言ってるんだよ、あんた。あんたも戦人だろ？戦いを楽しむ奴の面してる。」

真っすぐ俺を見据える。

こっちも観察されてたって事か。

「俺の言葉、間違っているかい？」

喧嘩は試合と違う。

危険なものが多いところなんてサイコーだ。
そして見物客は

「…大正解だよッ！！」

多いほどいい！！

「待たんかア！！」

突如一喝。

…楽しい所で ハア

「なんだよ。出鼻挫きやがって。」

「慶。我らは警備隊にござる！街中での私闘など唾棄すべきことなり！！」

「チツ頭固いな、おい。」

「なんとも言うが良い。道場はそこにござる。」

「分かったよ。じゃあアンタ行こうぜ。」

「ああ、さつさとやろう。」

指差す方へ行く。

道場は意外と広い。

…暴れても大丈夫だな。

「所で、アンタの名前は何だい？

いつまでもアンタは悪いだろ。

ちなみに俺は雷銅。只の戦人だ。」

遅れながらも自己紹介。

なら、俺も名乗らないとな。

「俺は南郷仙刀。よろしく。」

「へえ…珍しい名だな。どう分けるんだい？」

「名字が南郷、名前が仙刀。てか、普通じゃない？」

「普通じゃねえな。名字なんて初めて聞いたぜ。」

何だこの世界？

俺の常識が通じないかもな…

「まあ、名がなんであれ、南郷が戦人ってことは変わらんさ。
さあ、戦人と戦人が出会えばそこが戦場だ！！
楽しくやろうぜ！！」

「ああ、楽しくな。」

自然と口角が吊り上がる

心搏数も上がる。

制服の上着を脱ぎ捨てる。

こんなの邪魔だ

「ところで南郷。 お前得物はいいのかい？」

「俺は拳法家。 武器は拳足だけだ。」

そもそも使える武器なんて無いから。

「いいねえ。 アンタ最高だ！！本気でいかせてもらおう！！」

ああ、芳香だ
強者の芳香だ

「来いッッ！！南郷海皇舐めるなよ！！」

「戦闘開始ッ！！」

鎧男の大声

太鼓の吠える音

…始まった!!

「……………」

迂闊に近寄らない。

間合いを詰めない事には始まらないが、近寄らない。

力をはからないとな…

女性のウエストのような腕ってこんな感じだろうか。

腕力勝負はしない

…となると

戦う手段は限られる。

「オウツツ!!」

下からの振り上げツツ!!

膝を曲げて避けるツツ!!

「シャアツツ!!」

勢いを利用し回転しながらの一閃ツツ!!
はかるツツ!!

「ツハア!!」

掴む!!

手から悲鳴。

重いッッ!!

「吹き飛びなァッッ!!!!」

「んがッ!!」

槍をそのまま力ずくで振り回す!!

手が遠心力に負けて振り落とされるッッ

「んだッッ!!」

そのまま壁に叩きつけられた。

だがまだ雷銅は止まらない!!

「ハッハー!!」

ダッシュ攻撃!!

速さも叩きつける気が!!

「ラァッ!!」

「シッ!!」

屈んで避け足狙いの体当たり!!

倒す!!

「それは知ってたァ!!」

跳躍!!

それで躲された!!

「上え!!」

「!?!?」

上からの逆突き!!

槍の後ろの鉄の塊が降ってくる!!

「ッッ」

前回り受け身で逃げる!!

「良い動きだ!!楽しくなってきた!!」

「チッ…この馬鹿力が!!」

こいつ…夜叉より強い!!

「まだいくぜ」

槍での斬ッ!!

「カツ!!」

只避ける!!

そして懐へッ!!

「オウッ!!」

裏拳！！左の裏拳！！

馬鹿めッ！！

とるッ！

よけて勢いが落ちる時を狙う！！

左腕をとる！！

右手で掴み投げる！！

左は顎へ！！

「ッガッ！！」

頭から床に叩きつける！！

左を外し、顔への下段突きッッ

骨と金属の衝突音

槍の柄で防ぎやがった！！

バックステップで間合いを開ける。

「ッハッ！！」

立ったか…スゲエよお前。

だけだよ

「あれだけ打ったら景色がドロドロじゃろっ」

あれは会心の投げ…

それで頭を打ったら相当キツイ。

人によつては死ぬだろう。

「っはー、はー、」

「幕の引き時だな…格好良くな」

構えて深く腰を落とす

正拳ッ!!

腹に拳が突き刺さり

吹き飛ぶ巨体

槍が手から落ちる音

「決着ッ!!」

…勝ったッッ!!…!!

「驚き申した。よもや素手で勝つとは…」

「スゲエだろ!」

「ああ、本当に強いな。南郷。」

「復活ハヤッ!!」

…こいつ人間?

「慶。お主の負け、素直に認めよ。」

「もう認めてる。槍も落としちゃったしな。」

やっぱこいつ最高！！
メツチャ気持ち良い奴だ！！

「あ、スマン。少し聞きたい事があるんだけどいいか？」
一刀、そしてこの世界の情報を集める。
こいつなら嘘はつかない。

「ああ、いいぜ。なんだって聞いてくれ。」

「先ずここ何処だ？」

「益州。永安の白帝城だ」

どこ？

「何それ？」

え？マジで分かん。
どこ？

荷物の中に地理の教材あるか？
あった。

「益州：無いぞ」

「何だいその本は？」

「え？地図帳だけだ」

「なんだいこの絵は？」

「世界地図」

…なんで知らんの？

なんかスッゲー穴が開くほど見てる。

「益州か…中国っぽいな」

「中国？どこだい？」

は？

え、どういうこと？

「中国知らんってアウトだろ。アメリカ知らんぐらいやばいぞ。」

「あめりか？あうと？」

え？

何か凄い食い違いしてるような？

地図帳めくり中国のページへ何だ？何が起きてる！？

「忠、慶いるか？交替だ」

「うつせー邪魔だ！！」

「何事だ？」

誰か来たが気にしない！！

あつた！！

このページ！！

「これ！！中国コレ！！」

「ここらが益州だ」

ハイ？

「…慶は何をしている？」

「あれの相手にござる。」

外の声は気にしない。

どゆこと？

「この国の名前って何？」

「「漢」「」

なにそれ？

「すみません。もう一回…」

「「漢」「」

「あ、聞き間違いじゃなかったのね。」

………

行き詰まった…

「なあ、あんたスマンこっちからも聞きたい事が出来た。」

「？何？」

「あんた、天の御遣いなのかい？」

…なにそれ。

VS雷銅！……ここは益州、白帝城（後書き）

…原作キャラそろそろ出さないと…

く旅立ちく一刀殺るため三千里（前書き）

やっと旅立ち。

合流するのはいつやら…

く旅立ちく一刀殺るため三千里

SIDE 仙刀

… 大体理解した。

漢Ⅱ中国らしい。

初めて知った。

そして俺だが今の立場が

外国人そして…

異世界人、且つ未来人

… 誰か憂鬱な奴がいんの？

涼宮 ルヒ的な奴が。

氣を超能力としたら俺一人でS S団三人分だ。

ちなみに外国人、未来人はバレタ。

一刀の荷物のなかにあつた世界史のせいだ。
その結果

「漢が滅びるねえ。 まあ、兆候はすでにあるな。」

「左様。最早漢は末期にござる。」

「ふん、曹魏、孫呉、蜀漢の三国か…」

この国の歴史ばらしちゃった。テヘッ

… 我ながらムカついた

で、あと聞いたのが真名。
それがもう、大変でさ

「そついや、雷銅。お前さっきから慶って呼ばれてるけど何？
あだ名？」

「「「！」「」」」

「あれ？悪いことした？俺？」

なんかヤバい雰囲気…

「南郷殿。それは真名にござる。」

マナ？

あー、デュエでクリーチャー召喚に支払うアレ？

「真名とは命と等しいものだ。勝手に呼んだら斬られようと文句は
言えぬ。」

かなりヤベエ！！
何それ怖い。

「雷銅ゴメン！！ほんとすいませんでした！！」

秘技！バク宙土下座！！
全身全霊で謝る。

…ゴメン。

本当に良い奴なのに…こんな事しちゃって…

「……………」

無言

ヤバイメツチャ怒ってる。

「ごめんなさい。本当ごめんなさい」

「？何謝ってたんだ？」

「「ハア？」」

「俺を無手で下す程の漢。アンタの事気に入ったあ！！」

「は？」

あれ？何かおかしい。

「アンタに真名を預ける前に呼ばれた。むしろ光栄。首を取る気は毛頭無い！！」

「お前何言ってるの！？」

こいつらの説明と俺のバク宙を返せ！！

「あべこべな形だが俺の真名を受け取って欲しい。
俺の真名は慶>ケイ<！！！！よろしく頼む。」

「え？命と等しいんじゃないの！？」

「ああ。あんたじゃ無ければ叩き斬っている。たが…」

「だが？」

「あんたが異国の人間だと知って予想はついていた。可能性の一つが現実になっただけさ」

「……………」

デカイ…器がデカイ。

「アンタには真名が無いんだろう？返す必要も無いさ。」

「…仙刀だ。」

「うん？」

「俺のダチは名前で呼ぶ。

…仙刀と呼んでくれ。」

「ああ！！」

てな具合に友情が芽生えた。
戦って勝って仲間が増える。
どこの週間少年ジャン？

そして他にも…

「仙刀殿。用意はできてござるか？」

「ん。大丈夫」

この侍言葉が

張任

真名が忠>チュウ<

あの後、慶がそこまで認める漢なら
とか言って預けてくれた。

真名って重いんだよね？

俺の中で真名のインフレがヤバイ。

で、もう一人。

「何をしている。買い物に行くのだ…早くしろ。」

途中から来たコイツ

名前を冷苞

真名を仁>ジン<

身長は俺よりちょっと高い。

180センチぐらい？

外見は

黒髪で前髪をセンター分けして

後ろ髪は一本に首の辺りに纏め下げている。

なんか面が冷酷ってか、冷静っーか、冷の字が似合う。

ポケ ンなら間違いなく、こおりタイプ
そんな感じ。

そして今、武器屋にいる。

慶が『素手だけじゃ危ないから』と提案したからだ。

確かに分かるけど…

絶対、武器なしの方が強いぜ俺は。

武闘家にどうのつるぎとか装備させたら攻撃力さがるじゃん。
それと同じ理屈だ。

「よう！！親父！！邪魔すんぜ！！」

「らっしやい」

「うわー、メツチャRPGっぽいわー。」

「オイッ」

「ヤバッ」

俺たちの間で決まった事がいくつかある。

？御遣いであることを隠す

これは占いが原因だ

カンロだったか、カイロだったかが言った占いの内容がかなり有名
になったからだ。

どうやら『天』がアウトらしい。

理由は… 忘れた。

？制服は着ない。

これまた占いで白き輝く衣とあつたのがマズイ。
制服がその条件にしっくり当てはまつたからだ。
で、特定されるのを避けるためだつてさ。

？偽名を名乗る

これまた特定を避けるためだ。

まあ、偽名といつても

姓 南 名 郷 字 仙刀

となつた。

… 偽名？

？武器を持つ

これも占いのせいだ。

どんだけ占いに縛られるんだよ…

て、ワケで武器屋。

色々ある。

ひのきのぼう

こんぼう

どうのつるぎ

たびびとの服

皮のよろい

皮のたて

…これなんて最初の町？

割ってくださいと言わんばかりにある壺とタルから目を離す。

うまのふん。なんかありませんよ。

ほのかにかぐしい香なんか無いんだっ!!

今だけつまれ俺の鼻!!

ふと気付くと赤い宝箱。

「……………」

開けた方がいいのか？

いや、やったら泥棒だろ

しかし、あれだぞ。宝箱だぞ

ミツクの可能性が…

駄菓子菓子ここまでドラ エなんだ。

開けた方が…

「おい。」

「!?!?はいつ!?!?」

急に店主に話し掛けられる

めっちゃビクツた…

「その宝箱は開けるなよ。いいか!!絶対の開けるなよ!!」

開けるということですね。わかります。

ご丁寧にダチヨウ倶楽部的流れまで。

…こりゃあ開けるべきでしょう

「すまんが一時、廁に行くから待ってる。いいか絶ッッッ対に開けるな」

「……………」

そう言っでどこかに行く店主。

「……………」

パカッ

「開けるなと言ったるうが!!」

「戻るの早いなオイ!!!!」

俊足で戻ってきやがった!!

ボトより早くね!?

「で、何これ？」

中に入ってたのは手袋。

ただのではない。

全部の指先に長い刃がついている。

てか、某海賊漫画で服にウコの絵がある、あの執事で海賊だった奴の武器っぽい

「何これ?いくら?」

「引き取ってくれるならそれで構わん。」

マジ？ラッキー

でも何で？

「それは…呪われた武器だ…」

「呪？あるわけねーだろ」

「いや、事実だ」

そう言つて店主はポツリポツリ語りだした。

「それは…俺が昔作った武器だ…切れ味は最高。俺の最高傑作になる筈だったんだ…」

俺は店主の言葉を茶化さず静かに聞いた。

「名前を『化猫』と言つんだ。

だからかもしれん。これは化けたんだ。

…呪の武器にな。

コレは今までに三回売れたんだ。」

「……………」

「だが一人目は抜刀した際に自分の足を斬り…」

「待てや」

「何だ？」

「どう考えても買った奴の不注意じゃねえか!!」

「いや、呪だ」

「……………」

「話を続けるぞ。二人目は汗を拭おうとして腕を切り」

「おい待て!! また不注意だろ!!」

「いや、呪だ」

「呪すきだな!!」

「三人目は…」

「話続けんなアアア!!!!」

「上官との訓練で上官の髪の毛を剃り落とし
それが原因で惚れた女にふられ、その腹いせに軍をクビにされたんだ。」

「どこが呪!? てか、もう面倒臭いから、これ貰っていくからな!!」

「待て!! 今、それに続く話を考えているんだ!!」

「じゃあ呪とか嘘八百じゃねーか!!!!!!」

「だって呪とかあったりすると格好いいじゃん!!」

「黙れ、髭面厨ニイイイ!!!!!!」

「ギャアアアア!!」

「おう、仙刀。決まったかい？」

「うん」

「じゃあ金……」

「タダだよ。」

「は？」

「タダ」

「……ま、それでいいか」

翌日

「本当にお前らも来んの？」

「ああ、こつちに居た所で暇だからな。」

「左様にござる。劉璋でなく仙刀殿の力になるつ。」

「フツ…貴様の目指すもの見届けさせてもらおう。」

結局全員ついてくるつてさ。

男四人の旅…

最悪以外の何物でもない。

ムサイから。ガチで。

「さあ、仙刀。先ずは真つすぐ北に行くぜ。」

「北？何で？」

さつさと一刀を抹殺したいのに…

「ああ、涼州に行って馬を何とかしないとな」

「俺としてはさつさと虫けらと合流したいんだが…」

「なれど、急がば回れとの言葉もござる。」

「馬をさつさと手にいれるぞ。無駄口叩く暇など無い。」

一刀との合流。

この旅の目的は皆、受け入れてくれた。

ちよつと回り道だけどすぐ行くから待ってるよ。

「そつか…じゃあ行くか!!」

「おう!!」「ハッ!!」「行くぞ」

まともれよ…

SIDE 黄忠&嚴顔

「桔梗様、紫苑様お手紙が来ております。」

「なんじゃ？焰耶みせよ」

「ええ、誰からかしらね」

「はいッ！こちらです。」

「どれどれ」

「ふうん」

「誰からですか？」

「焰耶の兄弟子からじゃ。『再見』とデカデカ書いてよこしおったわい」

馬鹿弟子が。碌に挨拶も出来んのか。

「兄弟子？」

「ふふっ『恩に報いずに去る不孝な弟子をお許し下さい』ね。相変
わらずねあの子は」

大丈夫。あなたは私の自慢の弟子よ。

「しかし、行ってもうたか」

「そうですわね…」

行ってくるがよい、慶。

行っでらっしゃい、忠。

く旅立ちく一刀殺るため三千里（後書き）

簡単キャラ紹介

名 雷銅

真名 慶くケイく

中国読みだとくチンくになりますが
ケイでお願いします。

イメージ 戦国無双の前田慶次

名 張任

真名 忠くチュウく

イメージ 戦国無双の本多忠勝

名 冷苞

真名 仁くジンく

イメージ 三国無双の曹丕

そろそろ原作キャラが多くなります。

これからもこの駄文をよろしくお願いします。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7075y/>

真・恋姫†無双～南北コンビの三国志～

2011年11月23日17時52分発行